令和8年度

事務所だより　第2号

令和８年　１０月３０日
益田教育事務所

ウェルビーイング～「心理的安全性」が紡ぐ主体的・対話的な学び～

指導主事兼企画幹　澁谷　淳一郎

子どもたちの学力や学校での過ごし方・意識の変化について語られる際、引き合いに出されるのが「全国学力・学習状況調査」です。中でも、子どもたちの「今」を映し出す質問紙の調査項目は、時々の世相や教育的関心を反映して移り変わってきました。児童生徒の自己肯定感や「主体的・対話的で深い学び」に関する意識も細かく問われています。その中で注目したいのは「あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思いますか」という項目です。

島根県の肯定的回答（当てはまる、どちらかといえば当てはまる）は、小学校で 68.3%（全国 69.6%）、中学校で 71.5%（全国 67.5%）で、全国平均とほぼ一致しています。学級の約7割が一定の安心感を抱いている一方、約 3 割の児童生徒は「違う意見を言うと否定されるかもしれない」という迷いや不安を抱えていることが読み取れます。

質問番号		質問事項					
（20）		あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思いますか					
選択肢		当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらともいえない	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない	無回答
小学校	島根県（公立）	38.2	30.1	25.3	3.9	2.3	0.3
	全国（公立）	39.6	30.0	24.1	3.7	2.3	0.3
中学校	島根県（公立）	37.8	33.7	24.6	2.7	1.0	0.1
	全国（公立）	34.2	33.3	26.4	3.8	2.0	0.3

主体的・対話的で深い学びを進める上で、全員が安心して発言できる「心理的安全性」は不可欠であり、この現状は今後の学級づくりにおいて大きな改善の余地、つまり伸び代があることを示唆しています。文部科学省のデータ等では「先生が自分のよいところを認めてくれている」と感じる子どもほど、学級で意見を否定されないという安心感を抱きやすい傾向が示されています。教師が意図的に「違う意見こそ価値がある」と受容する雰囲気づくりをリードすることが、この 7 割という数字をさらに高めるカギになります。

では、どのように「受容する学級の雰囲気づくり」をしていくか。一例として「班ノート」を使った学級づくりのエピソードを紹介します。私の初任校では全学級で班ノートを活用した学級づくりが行われていました。最初は趣味などを一方的に書くだけだった子どもたちに対し、担任として「このことについて、どう考える？」と次の人に話題をつなげる投げかけを続けました。小さなつながりを積み重ねることで、子どもたちは少しずつ自分の思いを表出し、相手を受け止められるようになっていきました。

私が中学 2 年生を担任した時、小学 5 年生から不登校が続いていた生徒が転入してきました。学級の子どもたちから「彼にも班ノートを回してみよう」と声が上がり、そこからノートを通じた交流が続きました。そして卒業式の数日前、彼から「卒業式に参加したい」と意思表示があった

のです。当日の学級の雰囲気を心配していましたが、彼は「よう！」と教室に入り、初対面にも関わらず、これまでずっと一緒に過ごしてきたかのように談笑している姿がありました。後に話を聞くと、当日の学級には「自分を受け入れてくれるだろう」という自信と安心感があったと語ってくれました。この安心感は、何か特別な指導で生まれたものではなく、毎日の班ノートの中で互いの存在を尊重し、否定せずに受け止め合ってきた「日々の小さなつながりの積み重ね」が紡ぎ出したものだと思っています。

「人と違う意見を言っても否定されない」と心から思える学級は、一朝一夕ではつくれません。日々の営みの中で温かな結びつきを大切にし、誰もが安心して自分を出せる学級づくりを粘り強く行う必要があります。この結びつきは、主体的・対話的で深い学びを成立させる「心理的安全性」の基盤であり、「確かな学力」を身に付けるために欠かせないものです。また、互いの違いや個性を認め合う体験は、人権・同和教育が目指す理念と重なるとともに、いじめを未然に防ぐことにもつながります。

デジタル全盛の今、瞬時に他者とつながれる一方で、他人の視線を過剰に気にしたり表層的な情報に流されたりする危うさも潜んでいます。だからこそ、文字を書き、相手の言葉を受け止めて熟考し、自分の言葉で返す「班ノート」のアナログな手間暇に大きな価値があります。効率化が優先されがちな現代において、あえて時間をかける対話こそが、子どもたちの確かな自己表現と豊かな人間関係を育む基盤となるのではないでしょうか。

今年度の益田教育事務所の経営方針は「つながる・つなげる～子どもたちの『今』を支える～」です。子どもと教員、そして子どもたちどうしが深くつながり、ウェルビーイングな未来へつながる温かな居場所を、私たちの学校・学級から築いていきましょう。

つ れ づ れ・・・

被差別の立場の保護者さんと話す機会が割と多くあります。子どもたちの話が中心ですが、時には差別そのものの話になることもあります。

出会った保護者さんたちに共通しているのは、被差別の立場であることについて、子育ての中でどうしたらいいのか、どう伝えたらいいのか、伝えないといけないのか？…、そもそも何で自分たちは被差別の立場とされるのか、何か不利益はあるのか…、いつか自分も差別されるのか？子どもたちも？　…　…　いつもいつも考えておられる訳ではないですが、何かの折にふと疑問や不安や時には憤りが湧いてきます……何かの折にふと、です。大きくはないけれど、ふと湧き上がる、そんな不安を抱えておられることは確かです。



「人権の勉強も大切だし仲間との活動もいいとは思うけど、うちの一番は勉強です。」とおっしゃる家庭。「先生、そうはいっても差別はなくならんと思うんじゃぁ…」と絞り出すようにささやく保護者さんに何と応えるべきか、自分は何を応えられるのか……。被差別の立場の方とのお話は、いわゆる「差別の現実」に直に向き合う場でもあります。　（M）

“小さな おともだち”から 学んだこと

吉賀町教育委員会 派遣指導主事　泉妻 知子

吉賀町教育委員会での勤務も2年目となりました。これまでに経験することのなかったことを経験し、多くの気づきと学びの機会をいただいています。中でも幼児からは考えさせられることが多いです。ピアノを聞き、その音の数の人数でグループをつくる活動、指示された体のパーツを他の人とタッチさせる活動。幼児教育施設の子どもたちはキャーキャーとはしゃいでグループになったり、にこにこと右手同士を触れ合わせたりしていますが、その楽しい活動の中に、数や体の名称、左右を理解させる意図が隠されています。ずっと中学校で授業をしていた私にとって、新鮮で学びがとても多く、小さな子どもたちからは癒しだけでなく学びまでもらっています。

先日、訪問した幼児教育施設には、発達のゆっくりな子ども A さんが在籍していました。同年齢の子が言葉で意思疎通を図っているのに対し、A さんは自分の気持ちを顔の表情や手足の動き、言葉にならない音声で表現します。人と一緒に過ごすことが大好きで、みんなと走り回ったり、先生に手伝ってもらって制作活動をにこにこと楽しんだりしていました。

クラスでしりとりをする活動が始まりました。すんなり言える子、時間のかかる子さまざまですが一人ひとり順に進んでいきます。A さんの隣の子が「あり」と言いました。沈黙の時間が流れます。きっと A さんは飛ばされるのだろうと思い込んでいた私の予想は見事に外れ、しばらくして、A さんがリンゴの絵のカードを掲げました。A さんの次の子はすんなりと「ごりら！」と言ってしりとりが続きました。実は、横で先生が絵カードの中からリンゴのイラストのカードを探し出し、A さんに渡していたのです。このクラスのしりとりはこのやり方だったのです。

給食の準備は、自分たちにできること（お茶を汲む、食器を配るなど）を自分たちで行います。この日は A さんが当番で、スプーンを配る仕事が与えられていました。スプーンが入っているかごから1つ取り出し、座って待っている子の目の前に置く。次はまたかごのところへ行き、別の子の前に・・・この繰り返しです。A さんはスプーンを置くときに座っている子の顔を覗きこみ、時おり頭をなでなで・・・。とても時間がかかりますが、先生は離れたところからその様子を見ているだけです。クラスの子は何も言わず静かに待っています。「いただきます」の挨拶も、A さんは言葉にならない声でしたが、もう一人の当番と一緒に元気に務めていました。

言葉を発することができない子のための絵カードから生まれるクラスの一体感。役割を全うし、誰かのために仕事をすることで得られる達成感。「この子には難しいから」、とか「代わりにやってあげないと」ではなく、「できることをできるかたちで」がそういう一体感や達成感を生むのではないかなと思います。

インクルーシブ教育という言葉をさまざまところで耳にするようになりました。ただ単に同じ場所で学べばよい、というものではなく、そこには基礎的環境整備や合理的配慮の提供が必要とされています。例えば A さんのそばにいる先生、イラストの描かれたカードがそれらにあたるでしょう。また本人が持っている力を伸ばすという意味では、時には離れた場所からその子の様子を見守ることや、その子が失敗してしまうことも必要なのではないかと思います。

特別支援教育で培われた視点は、特別な支援を必要とする児童生徒に対してだけでなく、学力育成、不登校などの生徒指導上の問題に関わることにも通用するものだと改めて感じています。また、学びのチャンスはいろいろなところにあります。学校だけでなく、さまざまなところに視野を広げてみていただければと思います。



「猪突猛進、そして明鏡止水」

益田市教育委員会　派遣指導主事　　﨑山　智晴

4月から益田市教育委員会で、生徒指導担当として勤務しています。学校現場を離れて半年経ちますが、各学校や関係機関の皆様と関わる中で、多くの学びをいただいています。

私はこれまで、生徒指導に関わる業務を中心に教職員生活を送ってきました。どちらかといえば「まずは動こう」というタイプで、振り返れば猪突猛進そのものだったかもしれません。しかし、立場が変わった今、見えているつもりで見えていなかったことがたくさんあったように思います。学校だけでなく、教育委員会や福祉、医療、警察など、多くの機関がそれぞれの役割を担いながら子どもたちを支えていることを改めて実感しています。そして、「毎日が研修のようだ」と感じながら過ごしています。

6月上旬には、市内の全小中学校を訪問しました。訪問では、昨年12月に改定された「益田市いじめ防止基本方針」を踏まえ、各校の「学校いじめ防止基本方針」が校内外に適切に周知され、生徒指導に生かされているかを確認しました。また、全ての児童生徒の成長を支える「発達支持的生徒指導」の重要性についても伝えました。訪問を通して感じたのは、各校がいじめを重大な人権課題として捉え、組織的な対応に努めていることです。いじめの定義についても共通理解が図られ、児童生徒の小さな変化を見逃さない丁寧な見取りが行われていることを実感しました。いじめや不登校に関する数字は増加しているように見えますが、その背景には、教職員が子どもたちにしっかりと向き合い、支援につなげようと努めている姿があると感じています。

また、益田市では「アセス（学校環境適応感尺度）」を年2回以上実施し、その結果を校内研修や児童生徒理解に生かしています。調査を実施することが目的ではなく、その結果を具体的な支援につなげることが何より大切だと考えています。

さらに、不登校支援においては、「不登校0」ではなく「つながり0の撲滅」を目標に掲げています。7月31日に開催した益田圏域不登校ワークショップ（毎年開催し今年度は5回目）には市内外から82名の参加があり、多くの支援機関との情報交換を行うことができました。子どもたちを支えるためには、多様な立場の方々がつながることが大切ということを改めて感じています。

子どもたち一人一人が誰かとつながり、「自分はここにいていい」と感じられる学校や地域であってほしい。それが、今の私の願いです。子どもたちのために、私たちに何ができるのかを、ともに考えていきましょう。一人一人の小さなサインに目を向け、声に耳を傾け、その子に必要なつながりをともにつくっていきませんか。私も、学校、教育委員会、保護者、地域、関係機関を結ぶ「つなぎ役」として、これからも情熱を持ち続けながら、多様な立場の声に耳を傾け、ものごとの本質を曇りなく見つめる明鏡止水の心を大切にし、皆様とともに歩んでいきたいと思っています。

津和野町がつくる未来の笑顔
「0 歳児からのひとづくり事業」

津和野町教育委員会　派遣指導主事　中島佳亮

「あ、天使が来た……！」８月、教育委員会庁舎に素敵な笑顔の子どもが訪ねてきたとき、一瞬そう思いました。教員として学校にいた頃は、子どもと過ごす毎日が当たり前でした。子どもと直接関わる機会が少なくなり、子どもたちの笑顔からたくさんの元気をもらっていたことに気付かされました。



津和野町では、「0 歳児からのひとづくり事業」を推進しています。この事業の柱の一つが「タテの連携」と「ヨコの連携」です。

「タテの連携」・・・0 歳から 18 歳まで系統性のある教育環境づくり
「ヨコの連携」・・・開かれた保育所・学校と家庭・地域・行政が連携した教育環境づくり

先般、配慮が必要な就学児のケース会議がありました。そこには、小学校と中学校、民間、行政から各担当者が参加していました。その中で、就学児への対応の一つとして健康福祉課の職員が「事業の一つとして町で子どもを支えられないか」という提案をされました。この職員の思いと行動が私の心に大きく響きました。そして、この事業の先に、冒頭で紹介した子どもの素敵な笑顔があるのだなあと感じました。

「正解」とは何だろう――。子ども、保護者、学校、福祉、専門職、時には児童相談所や警察。一つの事案に対して、関係者で対応を検討します。その際、方針について考え方が合わないときもあります。それは、立場によって、見方や考え方が違うからです。しかし、検討をしている各担当者の根底には「子どものために」という思いが必ずあります。違う立場の人たちが「子どものために」という同じ思いをもって対応を検討している。この「場」が一つの正解なのではないかと思います。これこそが津和野町が推進している保育所と小学校、中学校、ときには高等学校のタテがつながり、学校と地域・家庭・行政とのヨコがつながり、『0 歳児からのひとづくり』になっていることに気付きました。

派遣指導主事として業務にあたる中で、学校と行政をつなぐパイプ役であることも大切な一つであると感じています。今まで学校現場で経験を積んだ自分だからこそ、学校現場の思いを理解しながら行政として業務に励んでいきます。津和野町が掲げる「0 歳児からのひとづくり事業」で多くの子どもを笑顔にできるように。